

平成9年度第2回11月12日

演題：体育・スポーツとパーソナリティの発達

演者：竹之内 隆志（体育科学部学）

体育・スポーツなどの運動経験がパーソナリティ発達に影響を及ぼす過程について検討した研究は少なく、運動経験の質を操作した研究や何らかのパーソナリティ変容理論を背景とした研究が必要である。

そこで、まず、大学でのスキー実習参加前後のパーソナリティの変化について、青年心理学領域で提唱されている自己分析による人格変容理論を援用しながら検討を加えた。自己分析による人格変容理論では、対象との関りが主体的・自我関与的である場合に新たな自己の発見が可能となるとされ、そうした対象との関りは自分の行動や心理状態を分析し自己洞察を得ることによって促進されると言われている。

94年度（実験群）ならびに95年度（統制群）の大学スキー実習参加者を対象者として、スキー実習参加前後に自己成長性検査を実施した。実験群に対しては3泊4日の実習中、毎晩その日の実習で印象に残った事を記述し、それが印象に残った原因をこれまでの経験との比較や自分の性格との関連から分析するように求めた。両群のスキー実習参加前後の自己成長性得点の伸びを比較した結果、統制群よりも実験群の伸びの方が有意に高かった。また、両群の対象者を各自技術の伸びの高低によって4群に分類し、自己成長性得点の伸びを比較した結果、技術の伸びの高低に関らず実験群の方が自己成長性得点が高く、実験群においては技術の伸びが高い群の方が低い群よりも自己成長性得点が高かった。つまり、スキー実習でのパーソナリティの発達過程として自己洞察的な振り返りが重要であり、自己洞察的な振り返りができる環境の上で技術が伸びるとさらにパーソナリティの発達が促進されると言える。

以上のように、スキー実習でのパーソナリティ発達過程の一端が明らかにされた。しかし、運動経験やパーソナリティの発達は幼児期から

既に始まっていることを考慮した場合、発達段階の一時期の特異な運動経験を取り上げているだけでは、運動経験とパーソナリティ発達の全体像は明らかにならない。つまり、今後の研究においては、運動経験をライフサイクル的な連續性を持った視点から捉え、運動経験の積み重ねがパーソナリティに及ぼす影響を検討していくことが必要であると考えられた。そこで、次にこうした研究の必要性を確認するために、幼児期から青年期に至るまでの運動経験を発達段階別に取り上げ、それらが大学期でのパーソナリティに及ぼす影響について検討した。

大学生44名を対象に、幼児期と小学期での健康状態と行なっていた遊びを調査し、さらに中学期と高校期での学校運動部への所属経験を調査した。パーソナリティは下田式性格検査とLoevingerの文章完成テストによって測定した。各発達段階の運動経験が大学期のパーソナリティに及ぼす影響をパス解析によって検討した。その結果、幼児期からの運動経験の積み重ねが大学期でのパーソナリティに影響しており、大学期でのパーソナリティに及ぼす運動経験の影響は発達期に応じて異なることが明らかにされた。つまり、発達段階を区分して運動経験を取り上げ、運動経験の積み重ねとパーソナリティ発達の関連を検討していく必要性が確認されたと言える。

パーソナリティ理論においては、発達段階に応じて重要となる心理社会的発達課題が設定され、それらを一つ一つ達成していくことによって健康なパーソナリティが形成されると言われている。そこで、今後、心理社会的発達課題の達成に寄与する運動経験の質の発達とパーソナリティ発達の相互関係を発達段階に沿って検討していくことが課題となる。